

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】 交流期間（最長3年間）を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。（自立的で継続的な国際研究交流拠点の構築と次世代の中核を担う若手研究者の育成の観点からご記入ください。）

本研究交流は、ラオス農村のコミュニティ開発の重要な要素として社会開発資本の形成、保健医療、農業の3分野を設定し、グローバル化の中で変動しつつも海外援助を受けながら自立を目指す農村を事例に、琉球大学とラオスの2大学、ラオスに隣接するタイの2大学とともに実施するものである。ラオス国立大学はラオス国において唯一の国立総合大学として、ラオス健康科学大学は唯一の保健医療系の大学として、同国におけるコミュニティ開発の新たな人材育成の役割が期待されている。タイにおいてもコミュニティ開発の人材育成は重要であり、コンケン大学、ウドンタニラジャパット大学はラオスに隣接する東北タイにおいて、ラオスの人材育成を含めてその任を果たしている。

琉球大学は、これまで公衆衛生、病院改善、歯科口腔外科など保健医療の分野を中心に協力をを行い、さらに附属小学校の教員交流や交換留学の推進など教育面での連携を行ってきた。琉球大学のチームによるJICAの地域歯科保健プロジェクトやコミュニティ母子保健の事業が草の根型で進められ、保健省やラオス健康科学大学との協力体制も拡大しつつあり、琉球大学ラオスサテライトオフィスを開設した。

グローバル化の中での有効なコミュニティ開発のためには海外援助の役割やボトムアップ型の視点を取り入れた内発的発展の実践が重要になってくる。ラオス国立大学社会科学部社会開発学科ではこのような新しい視点での研究が開始され、若手研究者の育成など琉球大学との連携も始まった。

そこで、本申請事業においては、琉球大学とラオス国立大学、同健康科学大学が進めてきた大学間協定に基づき、これまで取り組んできた様々なプロジェクトをネットワーク化させ、学際的にコミュニティ開発の研究交流・連携をすすめ、自立的で継続的な国際研究交流拠点の構築を目指す。これにはラオスと国境を接する東北タイの大学とのネットワークも活用し、琉球大学と同ラオスサテライトオフィスの2か所に共同研究、研究者交流、若手研究者の育成を継続することができる国際研究交流拠点を最終的に構築する。

自立的で継続的な国際研究交流拠点の構築のためには若手研究者の育成が最も重要な鍵になる。琉球大学で学位を取得したラオス・タイの若手研究者を中心に、拠点機関と協力機関の若手研究者や大学院生に学際的な研究チームやセミナーに参加させ、他分野と協働できる視野の広い若手研究者を育成する。

【研究交流計画の概要】 我が国と交流相手国の拠点同士との協力関係に基づく多国間交流として、どのように①共同研究、②セミナー、③研究者交流を効果的に組み合わせて実施するか、研究交流計画の概要を記入してください。

①共同研究：

研究Ⅰ (R1)：ラオスのコミュニティ開発においては海外援助が大きな役割を果たしている。ここでは、(1)社会関係資本の形成、(2)保健医療、(3)農業の3つの領域を設定し、海外援助を得ている農村コミュニティのフィールドワークにより現状を把握する。まず、トップダウン型のラオスにおいて、海外援助がコミュニティ内でのメゾレベルのアクターの育成や住民の主体性の喚起などの社会関係資本の形成に果たしている役割に焦点を当てる。そして、保健医療、農業の面でどのような実践が行われ、成果を上げているかを把握する。現時点では、ヴィエンチャン近郊の2つの農村と中南部3つの農村を予定している。

研究Ⅱ (R2)：海外援助を受けたコミュニティ開発のプロジェクトは、プロジェクトの終了後も自立的かつ継続的であることが求められる。R2では、R1の成果に基づいて、(1)社会関係資本の形成、(2)保健医療、(3)農業の3つの領域の内発性と持続可能性を、コミュニティの各レベルのグループのリーダーへのインタビュー調査やコミュニティのメンバーへの意識調査をもとに検証する。

②セミナーの開催：毎年、交流相手国の研究者が参加するセミナーを開催する。1年目のセミナーは研究対象地であるラオスで行い、各分野の研究者による講演を行って研究Ⅰの中間報告を交えつつ各分野を横断する共通の視点と基本知識を全体で確認・共有する。2年目のセミナーでは、各分野から研究Ⅰの調査結果と研究Ⅱの途中経過を発表してもらい、全体で調査結果を共有する。3年目のセミナーは、シンポジウム形式とし、研究Ⅰ、Ⅱの成果のまとめ・発信に加え、外部からの意見を広く取り入れる形式とする。加えて、若手研究者を中心に、次の研究費獲得のための研究計画書を共同で作成する。国際セミナーの開催にあたっては、2017年に設置した琉球大学ラオスサテライトオフィスを活用する。

③研究者交流：上記の共同研究やセミナー開催を通して研究者交流を進め、ネットワーキング形成を目指す。ラオスとタイは隣接しているため、それぞれの拠点機関・協力機関では主体的な往来が可能であり、琉球大学からも機会があれば直接交流に参加し、オンラインでの交流も行う。継続して研究交流ができるプラットフォームをSNSにて構築し、論文だけでなく動画(You Tube)による情報発信も行っていく。

[実施体制概念図] 本事業による経費支給期間（最長3年間）終了時までに構築する国際研究協力ネットワークの概念図を描いてください。

